

## <現代のことば>京都の中の伊勢

著者	グリーン ジョン
雑誌名	京都新聞
ページ	7-7
発行年	2015-03-16
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1368/00006042/">http://id.nii.ac.jp/1368/00006042/</a>

# 現代の ことば

ジョン・ブリー

本をやっと書き終えた。肩の荷が下りた。表題は『神都物語：伊勢の近現代史』。母語でない言葉で書くのは大変だが、調査は実に面白かった。

伊勢神宮に何度も足を運んだが、先月は千年以上の伝統をもつ遷御儀礼の一つに参列してきた。伊勢は儀礼の場であって、多くの儀礼の中でも祭神が引越す遷御儀礼が最重要である。遷御に参列しない。ことには伊勢を語る資格がない、と言ってもよい。表題にある「神都」は伊勢が明治20年代後期から用いた地名のブランドネームである。明治期の伊勢はどうか。京都に強いライバル意識があったように、明治28年に京都で開催された平安遷都千百年記念祭に刺激され、神都としての自己像を確立していく。伊勢は桓武天皇が創建した

## 京都の中の伊勢



京都をはるかに凌ぐ神の都だ、という響きを「神都」はもつ。当時の伊勢はまだ宇治山田という町にすぎなかったが、歴史的に見れば京都と伊勢との関係史が複雑で興味深い。

歴代天皇は8世紀の平安遷都以来、伊勢の天照大神を京都御所の内侍所<sup>ないしやく</sup>で祀っていた。しかし天皇は不思議にも伊勢を参拝しない。そのかわり古代から中世まで未婚の皇

女を伊勢地方に派遣し、齋王(一種の巫女)として天照大神に仕えさせた。齋王は京都の野宮神社で身を清めてから伊勢に向かう慣わしであった。ちなみに天皇による史上初の伊勢参拝は維新直後の明治2年である。

京都と伊勢の関係史を考えると、中世は特に重大である。1489年に吉田神社宮司の吉田兼俱<sup>かねき</sup>は天照大神が光り輝きながら吉田山に飛来してき

た。時の天皇に告げる。兼俱は、飛来を信じきった天皇から許可を得て、吉田山に内宮と外宮を打ち立て、伊勢の神々を祀る。吉田山の元宮の一面に内宮と外宮は今日に

ある。京都の上京区、中京区、下京区には神明町がある。そして高松神明、朝日神明、栗田口の神明、宇治の神明等のように神明社もあちこちに点在している。神明は、ほかでもない伊勢の祭神天照大神をさす名称である。これらの神社も中世に創建され、近世まで繁盛していたが、その存在は京都と伊勢の親密な関係を物語ってく

る。京都が神宮の創建神話に織り込まれたのも中世である。鎮座に相応しい地を探し求める天照大神は吉佐宮に立ち寄った伝説は中世にできた。吉佐宮は宮津市の籠神社だとい

う説があるが、この籠神社は(国際日本文化研究センター教授・日本史)